

可愛いココットと魔法の機  
関車<プリンセス・リバ  
ー>

kotoriyanews

<プリンセス・リバー>

あたしこと、元シルマリルの町の  
機関車案内人、ココット。

そして、森の国のお姫様だった、  
剣使いの少女、ミリアム。

そしてあたしの腐れ縁の、歌い手の  
少年、ルシア。

そして、あたしたちを襲った女泥棒さんで、  
大人のディードリッド。

あたしたちは猫の機関士さんや猫のココットたちと  
いっしょに、シルマリルの町に保存されていた、  
魔法で動く機関車<黄金号>で、旅をしている。

今ここは、南の海辺にある、コランタン地方の海辺の町、  
シルフなの。

つまりあたしたちは、そこで新しい旅人たちと  
出会ったんだ。

「倒れている女の子？」と買い出しに出かけた、  
ミリアムとディーが連れて帰ったのは、帽子をかぶり、  
フードをまとった、青い髪の女の子だった。

意識はない。

「眠っているようだな」とミリアム。

「暴漢に襲われていたのだ」とミリアムが続けて言う。

「暴漢？」ここは黄金号の中だ。

でも狭いわね……。

猫のココットがその様子を見て、あたしにいった。

「このボタンを押してみて」

「ボタン？」

すると、澄んだオルゴールのような音色とともに、あたしたちの客車の後ろに連結された、  
新しい、客車が現れた！

「すごい！ さすがは魔法の機関車ね！」とあたしたち。

いろいろと相談して。

「部屋割りには、あたし（ココット）＋ルシア＋謎の少女  
が一号車。ミリアム、ディーが二号車ね」とあたし。

ってルシアがいっしょ！？

狭い部屋で男の子と二人きり。きゃー。

とあたしが思ったとき、謎の少女が目を覚ました。

「大丈夫？ はい、これ暖かいレモネード」

「助けてくれてありがとう」と少女。

「あたしは、リバー家に使える召使い、プリシアって  
います。数年前から行方不明になった、  
＜プリンセス・リバー＞を探しているのです」

「プリンセス・リバー？」

「あたしたちの、主様の娘です。  
王族ではありませんが、見目麗しく、  
その姿は雛菊の咲き誇る野原もかくやと。  
清らかな川が流れる、せせらぎのように、  
美しく、優しい少女でした。  
それがあるとき、旅立ったきり、行方不明になったのが数年前」

「あたしは主様から、彼女を捜すように命じられたのです」

それは数ヶ月前のことだという。ところが  
旅慣れぬ彼女は路銀を使い尽くし、行き倒れになり  
かけていたところを、ミリアムとディーに助けられたのだ。

「どうだい。ここは、あたしたちが助ける番だって  
気がしないか？」とディー。

ディーは他の人を助けるのが好きだ。ミリアムは  
意外に成り行き任せなところがあり、ルシアはなにも考えていない。

「そうだな。助けるべきだ」とミリアム。

「賛成ね」とあたし。

「俺も賛成。なんかこんな可愛い子といっしょになれるってわくわくするじゃん！」と、バカの  
ルシアが  
大喜びでいった！

「ルーシーアー」とあたし。

「くすくす。いいですね。仲がよくて」とプリシア。

「仲よきことはよろしきかな。俺ルシア」

「あたしはココット。この子はミリアム。こっちの  
怖そうな目つきの人はディードリッド。ディーって  
呼んでるわ」

「ぼくが猫のココット」

「同じ名前なんですね」とプリシア。

「そうそう。魔法の機関車<黄金号>を操縦しているんだ」と猫のココット。  
にゃーにゃーと猫の機関士さんたちも鳴く。

「この子たちは、黄金号を管理しているのよね」とあたし。

「そうなんですか。で、その＜プリンセス・リバー＞ってどこにいるのか手がかり、教えてくれないかな？」とディー。

「こう見えても、あたしは人探しのプロでね」と彼女。

「まあ心強い。プリンセス・リバーは蜜が流れる霊薬の川のふもと、センティアの港にたどり着きました。そこから、霊薬を求めて、タタム川を遡ったのです」

「それでそれで？」

「そしてこの町にたどり着いたのです」

「この町？」シルフだ。

それをちゃんと聞いていなかったのか。ディーは。

「なんだよ？ リバーちゃんは、ずいぶんと辺鄙なところを旅したんだな。で、だ。黄金号は一気に行くことができる。ロシア用意はいいか？」

「合点承知！ ミリアムいいだろ？」ロシアは問いを返す。地下通路を使うか尋ねているのだ。

「……却下だ」

「なぜ？」

「ロシア、ディー。いいか。そうそう何度も地下通路を使ってはいけない。地下は時間が不確定なのだ。わたしたち森の民は、それを禁忌としている」

「……そうか。知らなかったよ……」とディー。

「って、プリンセス・リバーちゃんはこの町にいるんだよ～！」とあたし。

「そうなのか？」

「はい」

「シルフの町か。確かなんだろうな？」

「確かです。なんでも数年前から、この街では少女の誘拐が盛んになっているのです。そのため、あたしたちリバー家は密かにこの町に密偵を放っております」とメイドさんの少女がいう。こ、怖い。み、密偵？

もしかして、さっきの暴漢も……関係あるとか？

「そう来なくちゃな」とディー。つまりプリンセス・リバーはこの町で監禁されている。とディーとメイドさんのプリシアは睨んだのだ。

「ディー。あなた無茶し過ぎだよお」とあたし。

ゼロワンが殺されたの忘れちゃったの！？

ロシアはロシアでなにも考えていないし、ミリアムは高潔すぎて、なにを考えているのか分からないし、ディーは喧嘩好きな、＜はぶれもん＞だし、猫のココットは猫だし、あたしはずっと一人なの？

「ココット。怖いのか？」とミリアム。

「なんだ？ ココット。怖いのか？」

「そうじゃないけど。そうだけどお」とあたし。

「分かるよ」とディーがいてくれた。

「怖いモンは怖い。このお嬢ちゃんもただモンじゃないみたいだしな」

「こほん。ここでこの町の勢力図を説明したいと思います」

ここから数十キロ南にリバー家の領地があり、さらにこの町は独立して、領主タイトル家が治めている。

タイトル家はなんでも東方からの使者と関係している家柄だ。

「つまり、プリンセス・リバーはこの町の領主に誘拐されたのか？」

「それは違います。リバー様を誘拐したのは、この町を拠点とする犯罪組織「ハン」です」

「聞いたことないな。ハンだと？」とディー。

そういえば、ディーも泥棒さんなんだったね。

「ごく小規模な組織なのですが、数年前から急激に勢力を成長させています」

ハンと領主たちは対立しており、タイトル家とリバー家に対する恐喝として、犯罪組織ハンは、プリンセス・リバーを誘拐したのだ。と推測されている。

「なんで？」

「リバー様はここに嫁ぐことになっておりましたので」とメイドさんのプリシア。

「で、その肝心のリバーちゃんの行方が分からない、と」

「そうですね」とプリシア。

「なんかおっかないね……」とあたしことココットはいう。

「用心しろよ。敵の狙いはこのメイドさん、そして彼女を助けたわたしたちだぜ」とディー。

そんなあ。

危機管理が必要になるときだ。とあたしたちは判断する。

猫たちもあたしたちの客車でいっしょに休む。最低、二人連れで行動する。

喧嘩なれはしているものの、プロとはいえない、ルシアは喧嘩のプロのディーと二号車で。

戦闘能力が高い、ミリアムと戦闘能力皆無のあたし、そして、プリシアは一号車で休むことになった。

「もちろん猫たちもいっしょだ」

「可愛いですわね」とプリシア。

「ちょっと外の空気にあたりにいってくるね」とあたし。

「なんで？」

「トイレ」

「じゃあ俺が護衛しようってふがふが」ばこばこぼこぼこ。ルシアの変態！><とあたしは思い

っきり

ルシアの顔面を、ぐーで殴る。

「わたしが護衛しよう」とミリアム。

「そうだな。そうしてくれ」

「あー外の空気は気持ちがいいなあ」とあたし。

って覆面の敵に囲まれているし。本当に狙われているんだ。

「そいつがプリンセス・リバーか？」複数の男たち。

「誰？」

「お前だ」とあたしを指差す。

え？ え？

ええ—————？

「勘違いしているようだ。気をつけろ」とミリアムが剣を抜く。

そのまま駆け寄ると、居合いで一気に凧ぐ。

その勢いは凄まじく、敵の刀をへし折るほどで、覆面の男たちは怯む。

「逃げるんだ！ ココット！」

「で、でも」

「ここはわたしがひきつける」とミリアム。

「助けを呼んでくるね」

あたしは駆け出す。それを見て、男が追いかけてくる。

怖い。

「大丈夫か？」とディー。あたしのまえに現れる。

「ミリアムが！ 一人で戦っているの！」

「あの……馬鹿。無茶するから！」とディー。

そしてミリアムはいなくなっていた。

「これ血だよな」

「誰の血かは分らん」それほど多くない。

ミリアムのもの？ それとも覆面の男たちのもの？



「さて、どうする？」ディーが黄金号のなかであたしたちに尋ねる。

「助けなきゃ！」

「そうだな。ミリアムの行方を捜さねば」

あたしは、あたしが「プリンセス・リバー」と思われていることを説明した。そこで、あたしたちはプリシアの手引きで、領主タイトルと接触することになった。

そのあと、街の原っぱにとめてある<黄金号>へと帰ってきた。

猫たちが、バケツに入った新鮮な真水で雑巾を絞って、魔法の機関車を磨いている。

「あーいいなあ。あたしも手伝ってあげるね」とあたし。

客車の一号車にはディーとあたし。客車の二号車にはルシアとプリシア。猫たちは機関車。

「いいですわね」とプリシアがくわわる。

「ほら！ あなたも手伝いなさいよ！」とわたしたちはルシアにいう。

「えーいいよいいよ」

「ってルーシーアー」

「くすくす。本当に仲がいいんですね」

「……ねえ、プリンセス・リバーって本当に生きているのかな？」

「それは分かりません……」とプリシア。

ディーが帰ってきた。領主タイトルの館で披露会があるのだが、そこに「新しい少女」がやってくる。という設定であたしたちが招待された。

「そ、それは……うーん……」

あたし？ あたしがプリンセス・リバーの役割？

「というよりも少女誘拐事件に領主タイトルも相当悩んでいる。しかしどうも怪しい」

「怪しい……とは？」とプリシア。

ディーは迷った様子だったが、やがて、推測を話す。

「君はわたしたちを裏切らないよな」

「え、ええ」とプリシア。

「あたしは領主タイトルが今回の少女たちの誘拐犯の犯人じゃないかと思っている」

「えーなんで」あんな優しそうなおじさんなのに？

「ココット。領主様は、ココットちゃんは好みそうだったからな。それで招待した。とか？」と

プリシア。

「ないない。そんなばればれなことするわけないし。それに可愛くないよ。あたし^^」とあたしはいう。

「うーん。なんか引っかかる……」

でもまあ招待されたものを断るのもなんだし、あたしとルシア、ディーとプリシアはお屋敷に、向かうことになった。

あたしたちは普段と変わらない服装だ。

「えなんでこんな格好するの？」

とあたし。ドレスが手渡される。着替えるための部屋。

そういえば、あたしはプリンセス・リバーと思われているんだよね。

じゃあ着替えよっか。とそこであたしは視線を感じた！

## 5 ページ目

---

テーブルの下？

なにもない。

気のせいかな？

「ルシア来て……ここ地下室があるみたい」とあたりは部屋のテーブルのしたをしてみる。

そこにはカモフラージュされた地下室の入り口が。

「ビンゴ？」

「単なるワイン倉って考え方もある」とディー。

「どうなんだろ？」

「でも引き下がれないよね」

「そうだ。そうだ」とルシア。

あたしたちは地下室へと潜った。ルシアが部屋に残って、見張りの役割だ。

「なんだすぐに行き止まりか」とディー。たしかに地下室の壁は、積み上げられたレンガと土の、壁面によって覆われていた。

レンガには古い新しいの境目で、継ぎ目がある。

ということはここはもっと広がったはず……。

うーん。と困惑するあたしたち。壁を掘るわけにもいかないし。カンテラの灯りだけが頼りだ。

と、そこであたしに聞こえてきたかすかな音。

「壁の向こうから、音がするわ」とあたりは10平方メートルほどの地下室（地下通路の入り口？）で、みんなにいう。

「本当か？」とディー。

「あたり耳はいいのよ」とあたり。

「水の音かしら？」

プリシアがカンテラをもったまいう。すらりとした少女だ。

「よしここはあたりが調べておく。お前さんたちは、パーティ会場に向かうんだ」と女泥棒のディーがあたりとプリシアにいう。

そして、ドレスに着替えて、ルシアと合流した、わたしたちがパーティ会場で紹介されているときに、どたどたという音がして、覆面の男たちが入り込んできた。

その男たちといっしょに、仮面を被った少女が！ ミリアム？

「なんで？」とあたり。

仮面の少女は仮面を外す。彼女はミリアム。

ルシアがむかってゆく。ルシアがミリアムに、剣の峰で弾かれる。峰打ちだ。

「気をつけろ！ こいつミリアムじゃないぞ！」とルシア。

ミリアムが犯罪組織の手先？

違う。ミリアムにはそれなりの考え方があるんだ。とあたしは思う。

「プリンセス・リバー殿。お連れに来た」とミリアム。

「ミ、ミリアム」

「ココット。君の事はよく知っている。ここは大人しくわたしたちと来るんだ」とミリアム。

そこに館の兵士たちと覆面の男たちが戦っている。

「ココット。あの方は本来のミリアムではありません。おそらく洗脳されているのでしょう」とプリシア。

「違う。ミリアムはミリアムだよ」

「じゃあなんで犯罪組織の手下になったのですか？」

とそこであたしはピンと来るものがあった。プリシアはなにか間違えたことを隠している！

ミリアムたちは、護衛の兵士たちと戦っている。少女たちの悲鳴。

パーティ会場では戦闘が続いている。

「あたし、ミリアムたちとついていく。みんなも来て！」

「なんで？」

「とにかく来て！」とあたし。

あたしたちは犯罪組織ハンに合流したミリアムとともに逃亡した。

あたしとルシア、ディーがいっしょだ。

「ディー？ 部屋の下、地下室はどうだった」騒ぎを聞いて地下室から戻ってきたのだ。そしてあたしたちと、いっしょに合流した。

「いや、わたし一人の手ではあの石の壁は崩せなかった」

「あやしい」

「それから地下で、こんなものを拾っちゃった」それはきらきらした一本の白銀の髪の毛？

「女の子……の髪の毛だ。若い女の子の」あのやさしそうな領主様は少女の誘拐犯だったの！？

「じゃあ、少女を誘拐していたのは領主だったの？」

「どうだろう？」

「えっちなこと……したりしたのかな」とあたし。

「うーん。そうかもな。でも、単なるワイン倉じゃない？」とディー。

ってそれはないよー。

「まさか領主様が」とプリシア。